

国立国語研究所学術情報リポジトリ

An Analysis of the Verbs Denoting Spatial Movement : On the Basis of Syntactical, Aspectual and Taxis Features

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡田, 幸彦, OKADA, Yukihiro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002067

空間移動を表す動詞の分析

——構文特性・アスペクト特性・タクシス特性に基づいて——

岡田 幸彦

(獨協大学・拓殖大学)

キーワード

空間移動を表す動詞, 経由 (+/- 範囲) 性, 到着性, 過程性・結果性, 完結性

要旨

空間移動を表す動詞『あるく』『いく』『もどる』『すすむ』『のぼる』『おりる』『わたる』『とおる』は、名詞「(場所)を」と結合し、その「(場所)を」に経由地の意味を与える、経由性を持つ動詞である。このうち『あるく』は「(場所)まで」とも結合可能な経由(+範囲)性動詞、『いく』『もどる』『すすむ』『のぼる』『おりる』は「(場所)まで」「(場所)に」とも結合可能な経由(+範囲)=到着性動詞、『わたる』は「(場所)に」とも結合可能な経由(-範囲)=到着性動詞、『とおる』は経由(-範囲)性動詞である。一方、『のぼる』『おりる』『わたる』は常に到着によって終わる移動を示すわけではなく、『とおる』と共通した面を持つ。過程性・結果性(アスペクト特性)・完結性(タクシス特性)を導入することによってこれらの動詞のより詳細な記述が可能となり、『いく』『もどる』が結果性を、『すすむ』が過程性・結果性を持つ動詞となるのに対し、『のぼる』『おりる』『わたる』は過程性・完結性を持つ動詞となる。

0. はじめに——場所を表す名詞の格と空間移動を表す動詞との結合の有無の違い

動詞『あるく』は、『道を あるく』のように、場所を表す名詞の「～を」格(以下、「(場所)を」と表記)とともに用いられうる。このような「(場所)を」は、普通「人や物がうつりうごくところ」(鈴木(1972), 以下では「経由地」と呼ぶ)を示すと説明される。『あるく』の他、『いく』『もどる』『すすむ』『のぼる』『おりる』『わたる』『とおる』などの動詞も、「(場所)を」(経由地)とともに用いられうる。

- 1) ある人は、乾いた砂漠をゆく。(雲の宴・下・45)
- 2) ……さっき来た道をまた戻った。(悪霊の午後・下・59)
- 3) ……狭い廊下をすすみ洗面所をのぞくと、…。(丘の上の向日葵・165)
- 4) 信夫は坂道をのぼりながら、…。(塩狩峠・25)
- 5) ドアを閉め、小走りに石段をおり、…。(丘の上の向日葵・165)
- 6) ……車道を小走りに渡った。(丘の上の向日葵・24・25)
- 7) ……窓のすぐそばを人が通る。(塩狩峠・61)

これらの動詞には、「(場所)を」とともに用いられ、その「(場所)を」が経由地を示すという共

通性がある。

これらの動詞と、「(場所)を」以外の、場所を表す名詞の格との結合の有無は、動詞によって異なっている。例えば、『あるく』および『いく』『もどる』『すすむ』『のぼる』『おりる』は、場所を表す名詞の「～まで」格（以下、「(場所)まで」と表記）とともに用いられうる。

8) ……板橋本町のアパートから、旧中山道沿いの商店街をJRの板橋駅まで歩いて、……（異人たちの館・73）

9) 「お客さん、芹生の里に行かれるのですか」

と運転手に念を押され、

「いや、そこまで行く途中で」（悪霊の午後・上・80・81）

10) ……もう一度道まで戻ると、……（雲の宴・上・310）

11) ……孝平も押されて、反対側のドア近くまで一気にすすみ、……（丘の上の向日葵・44）

12) 私は見舞客を装って三階まで登った。（海と毒薬・24・25）

13) ……今日はわざわざロビーまでおりるのが面倒くさかった。（悪霊の午後・上・63）

これに対して、『わたる』『とおる』は普通「(場所)まで」とともに用いられない¹⁾。

また、『いく』『もどる』『すすむ』『のぼる』『おりる』『わたる』は場所を表す名詞の「～に」格（以下、「(場所)に」と表記）とともに用いられうる。

14) パジャマのままリビングにいくと、……（きらきらひかる・41）

15) ……汗まみれになって家に戻った。（海と毒薬・14）

16) 孝平は前後どちらのドアに進もうかと短く迷い……（丘の上の向日葵・47）

17) 本館の屋上にのぼると、……（海と毒薬・40）

18) ひとりで食堂に下りると、……（雲の宴・上・326）

19) 第一、北海道に渡ってすぐに、妻をめとる気にはなれなかった。（塩狩峠・239）

これに対して、『あるく』が「(場所)に」とともに用いられることは、例20のように不可能ではないとしても、自然な例であるとは言えない²⁾、『とおる』と「(場所)に」との結合も普通に見られる用法ではない³⁾。

20) 居間のソファではなく、台所に近い食卓の椅子に孝平は歩いた。（丘の上の向日葵・209）

以上の場所を表す名詞の格と動詞との通常の結合の有無は、次のようになる。

	「(場所)を」(経由地)	「(場所)まで」	「(場所)に」
あるく	○	○	
いく・もどる・すすむ・ のぼる・おりる	○	○	○
わたる	○		○
とおる	○		

表1：空間移動を表す動詞と場所を表す名詞の格との結合の有無

この「(場所) を」以外の格との結合の有無から、これらの動詞の語彙的意味の特性を導き出すことが可能ではないだろうか。一方、『いく』『もどる』『すすむ』『のぼる』『おりる』は、名詞の格との結合関係の有無からは違いが見られないが、これらの動詞の語彙的意味が全く同じ特性を持つのかという疑問も生じる。「(場所) を」によって示される経由地について言えば、動詞の語彙的意味の特性の違いに応じて、何らかの違いがある可能性が考えられる。

本稿では、上でとりあげた、「(場所) を」(経由地) とともに用いられる8動詞を例に、「(場所) を」以外の場所を表す名詞の格との結合の有無の違いの背景として、各動詞の語彙的意味のどんな特性を設定できるか、一方で、場所を表す名詞の格との結合の有無では違いが見られない『いく』『もどる』『すすむ』『のぼる』『おりる』を、各動詞の具体的文脈におけるふるまいに現れる、語彙的意味の何らかの特性に基づいて下位分類できるか、そして、それらの特性を通して、これらの動詞の相互関係をどのように記述できるか、さらには、各動詞の語彙的意味の特性に応じて、ここで経由地として一括して扱った、その動詞の結合相手である「(場所) を」の間に、どんな違いを設定できるかを考察する。

なお、文中、独自の意味で用いた記号は以下のとおりである。

「」：①原文に用いられた形のままの引用

②本稿で独自の用い方をした用語（基本的に最初の使用のみ）

『』：①名詞・動詞の原文の使用の形式から切り離れた引用；「道」を「道まで」「道に」は全て『道』とする

②動詞連語の、中心となる動詞の形式から切り離れた引用；「部屋に いった」「部屋に いる」「部屋に いく」とは全て『部屋に いく』とする

A=B：AかつB

A/B：AまたはB（AかつBの場合を含める）

....：引用文中の、引用者による省略

1. 場所を表す名詞の格との結合から見た動詞の性格付け

ここでは、場所を表す名詞の格との結合から、その動詞の語彙的意味の、どんな特性を設定できるかについて考察し、各動詞の性格付けをしてみたい。

まず、「(場所) を」とともに用いられ、その「(場所) を」が経由地を示す、という現象から、その動詞の語彙的意味のどのような特性を設定できるだろうか。0. で見た「(場所) を」(経由地) を、例えば以下の例における「(場所) を」と比較してみる。

21) 瓜生はそう言うと、冴子を押し出すようにして部屋を出た。(雲の宴・下・101)

22) 人影のない廊下を助手が去ったあと、.... (海と毒薬・150)

23) 大吉はおそらくバスチーユを離れ別の地区の表情を撮影しているに違いない.... (雲の宴・上・22)

24)オーストリア公ドン・ホアンは、すでに六月六日に、マドリードを発ち.... (レパントの海戦・124)

例21-24では、「(場所)を」は出発地を示している(奥田(1968-72)(以下、奥田(1968-72)からの引用のページ数は言語学研究会編(1983)のものによる)p.140「はなれるところ」をあらわす連語、および宮島(1972)p.204「裏門をでかける(出発する)」の例を参照)。「(場所)を」は、結合相手の動詞に応じて、経由地を示す場合と、出発地を示す場合とがある。この現象は、同じ「廊下を」が、『廊下をすすむ』において経由地を示している例3と、『廊下をさる』において出発地を示している例22とを比較すると、より鮮明になる。この事実から、『廊下をすすむ』の「廊下を」が経由地を示すのは『すすむ』とともに用いられているためであり、『廊下をさる』の「廊下を」が出発地を示すのは『さる』とともに用いられているためである、と考えざるをえない。動詞の側から見れば、『すすむ』は「廊下を」に経由地の意味を与え、『さる』は「廊下を」に出発地の意味を与えている。『すすむ』が具体的文脈において用いられる場合には、ともに用いられる「(場所)を」に経由地の意味を与え、経由地がどこであるのかが明示される、ということになる。本稿では、このような、名詞の特定の格との結合から明らかになるその動詞の語彙的意味の特性を、便宜上その動詞の「構文特性」と呼び⁴、「(場所)を」に経由地の意味を与える動詞の構文特性を「経由性」と呼ぶ。

では、「(場所)まで」と結合することから、その動詞の語彙的意味のどんな特性を設定できるだろうか。まず、「(場所)まで」と結合可能な動詞は、たいてい、「(場所)を」とも結合可能である(宮島(1986)によれば、「(場所)まで」と結合可能な自動詞で、「(場所)を」「経過点」すなわち経由地との結合が挙げられていないのは、『いつてくる』『ちかよる』だけである)。また、移動方法が明示される場合(例25)、移動の付帯状況が明示される場合(例26)に、その終点(到着地とは限らない)を示すために「(場所)まで」が用いられることがある。

25) ……まずコンスタンティノーブルからアドリア海の沿岸都市カッタロまでは陸路を行き、……
(レパントの海戦・101・102)

26) 「バス停まで一緒にいったんだけど、……」(流しのしたの骨・187)

さらに、途中の地点に一時的に停止することを示す場合(例27)、あくまでも移動の結果としてそこに至ったという場所を示す場合(例28)にも「(場所)まで」が用いられる。

27) トルコ艦隊の規模は強大で、海戦をしても勝利は危いから、ひとまずギリシアのネグロポンテまで行き、……(レパントの海戦・154)

28) 「……これでお父さん帰って来たら、大声でまた叫びそうで、自分が怖くなって、車を出したの。渋谷まで行っちゃったの。……」(丘の上の向日葵・189)

「(場所)まで」は、経由性を前提としており、移動範囲の終点を示すために用いられる、すなわち、「(場所)まで」と結合可能な動詞は、経由性動詞のうち、移動範囲を問題にできる動詞である、と言える。以下では、「(場所)を」(経由地)、「(場所)まで」どちらも結合可能であることから設定できる動詞の構文特性を「経由(+範囲)性」と呼ぶ(これに対して、「経由(-範囲)性」と記した場合には、「(場所)まで」との結合が普通考えられない動詞の経由性、つまり移動範囲を問題にしない経由性に言及し、単に「経由性」と記した場合には、経由(+範囲)性・経由(-範囲)性の区別をせずに言及する)。

今度は、「(場所)に」と結合することから、その動詞の語彙的意味のどんな特性を設定できるか、について考えてみる。例14-19では、「(場所)に」は到着地を示している。しかし、「(場所)に」は、結合相手の動詞によっては、実際の到着地ではなく、潜在的な目的地を示す。例えば以下のような動詞とともに用いられる場合である。

- 29) ……その日の夕暮、南条の事故があった場所に出かけることにした。(悪霊の午後・上・79)
 30) 「今日は選考がむつかしくなりそうだぞ」
 と藤網は部屋に向いながら前を歩く坂井に声をかけた。(悪霊の午後・上・10)
 31) 女は歩道に上がり、信用金庫のビルに近づき、角を曲がりかけて、…。(丘の上の向日葵・24)

例14-19と例29-31との比較から、『いく』『もどる』『すすむ』『のぼる』『おりる』『わたる』は「(場所)に」に到着地の意味を与えるという構文特性を持ち、『でかける』『むかう』『ちかづく』は「(場所)に」に目的地の意味を与えるという構文特性を持っていることがわかる。『いく』以下の動詞が具体的文脈において用いられる場合には、ともに用いられる「(場所)に」に到着地の意味を与え、到着地がどこであるのかを明示している。以下では、結合相手の「(場所)に」に到着地の意味を与える動詞の構文特性を「到着性」と呼ぶ。

以上の構文特性を用いると、0. でとりあげた動詞は、以下のように性格付けできる。

あるく	経由 (+範囲) 性動詞
いく・もどる・すすむ・のぼる・おりる	経由 (+範囲) = 到着性動詞
わたる	経由 (-範囲) = 到着性動詞
とおる	経由 (-範囲) 性動詞

表2：構文特性による各動詞の性格付け

ところで、次のような現象が見られる。

- 32) その登音は階段をゆっくりと登ると、この手術室の方向に進んでくる。(海と毒薬・153)
 33) 「でも遠いんです。坂を上っておりて、もう一つ坂をのぼって丘の上」(丘の上の向日葵・20)
 34) 二つ先の駅に行く道はいくつかあったが、常識的には駅前に出て陸橋を渡り、大きな団地脇を西に進むことになる。(丘の上の向日葵・253)

表2では、構文特性から、経由 (+範囲) = 到着性動詞と性格付けをした『のぼる』『おりる』、経由 (-範囲) = 到着性動詞と性格付けをした『わたる』であるが、具体的な文脈において、特に「(場所)に」とともに用いられない場合には、示される空間移動は、必ずしも到着によって終わるわけではない。例32-34は移動全体のうちの中間段階を示している。これは到着性を持たない経由 (-範囲) 性動詞『とおる』に見られる用法と共通している。

- 35) 私はまだ湿っているおばあさんの下駄を突っかけると、庭を通って外の門のところまで行った。(ポプラの秋・44)

『のぼる』『おりる』『わたる』が、具体的な文脈において、到着によって移動全体が終わることを明

示するのは、「(場所)に」とともに用いられる場合である(例17-19)。この事実から、具体的文脈において到着によって終わる移動を示すことが普通であるような、到着性が語彙の意味に固有である動詞と、「(場所)に」に到着地の意味を与えることができても、具体的文脈においては常に到着によって終わる移動を示すとは限らない動詞とがある、と言えるのではないだろうか。動詞の語彙の意味には、名詞の特定の格との結合関係からだけでは明らかになりにくい特性が存在し、構文特性も含めた諸特性の相互作用によって、具体的文脈においてこのような現象が起ると予想される。

0. で経由地と呼んだ「(場所)を」については、結合相手の動詞の「(場所)まで」との結合可能性の有無によって、「範囲を問題にできる経由地」・「範囲が問題にならない経由地」という違いがすでに設定できる。

そこで、以下では、

I) 空間移動を表す動詞の語彙の意味の、場所を表す名詞の格との結合からだけではとらえきれない特性を求めるために、

①経由(+範囲)=到着性動詞とした『いく』『もどる』『すすむ』『のぼる』『おりる』の間に、すなわち、構文特性から見ると同じグループに入る動詞の間に、何らかの語彙の意味の特性の違いを設定できるか

②逆に、上で設定したグループ(あるいはグループのうち一部の動詞)の間に、経由性以外の共通の語彙の意味の特性を設定できるか

を通じて、各動詞の語彙の意味のより詳細な性格付けを目指し、一方、

II) 各動詞の結合相手である「(場所)を」に、その動詞の語彙の意味の特性に基づいて、「範囲を問題にできる経由地」・「範囲が問題にならない経由地」以上の違いを設定できるか

についても考察する。

2. 「(場所)を」と空間移動を表す動詞との結合についての先行研究

ここで、「(場所)を」(経由地)と空間移動を表す動詞との結合について考察した先行研究を見おきたい。これについては、(1)「(場所)を」と動詞との関係という面からの研究と、(2)空間移動を表す動詞の語彙の意味そのものの性格という面からの研究とがある。

2.1. 「(場所)を」と動詞との結合についての研究——奥田(1968-72)から

(1)に属する研究として、奥田靖雄(1968-72)がある。そこでは、「(場所)を」と空間移動を表す動詞との関係が、次のように分けられている。

空間的なむすびつきをあらわす連語では、かざり名詞は移動動作のおこなわれる場所をあらわしているが、その場所と移動動作との関係はいちようではない。かざられ動詞の語彙的な意味の性格のちがいにしがつて、それはつぎのみつつの下位のカテゴリーにわかれる。

(イ) うつりうごくところ

(ロ) とおりぬけるところ

(ハ) はなれるところ (p. 140)

本稿でいう経路地は、(イ)と(ロ)に分けられている。(イ)については、

うつりうごくところをあらわす連語では、かざり名詞のさしだす場所の範囲のなかで移動動作がおこなわれる。(p.141, 下線は引用者)

とされ、そのような連語をつくる動詞として、

(A)「移動動作を方向性という観点からとらえている」動詞

いく, くる, もどる, のぼる, あがる, おりる, くだる, まわる, まがる, すすむ, むかう

(B)「移動動作を様態という観点からとらえている」動詞

あるく, はしる, はう, かける, およぐ, とぶ, すべる, つたう, たどる

以上の動詞が挙げられている。一方、(ロ)については、

とおりにぬけるところをあらわす連語は、とおる, わたる, こえる, ぬける, すぎる, へる, よこぎるのような動詞からできていて、ある空間を移動動作が通過することを表現している。

しかし、たとえば、橋をわたる, 山をこえる, トンネルをぬける, 道をよこぎるのような連語をみていると、を格の名詞でしめされる場所は、はるかに対象性がつよいといえるだろう。

(p.144, 下線は引用者)

と記述されている。

2.2. 空間移動を表す動詞の語彙的意味の性格についての研究——宮島(1972)から

(2)に属する研究としては、宮島達夫(1972)にある以下の記述が挙げられる。そこでは、

....ある動詞が移動の開始(すなわち出発)から終了(すなわち到着)にいたるまでの、どの段階に重点をおいて表現しているかを調べることにする。(p.203)

という問題提起のもとに、

a)「～ている」の形において、主として動作の進行をあらわすか、結果をあらわすか。

b)「～ていく(くる)」の形があるかどうか。

c)経過点をあらわす目的語「～を」をとるかどうか。

という三つの基準に基づいて、空間移動を表す動詞が以下の四つのグループに分類されている。

①出発の段階に重点があるもの。「でかける」「出発する」の類

～ている：結果, ～ていく：○, ～を：×

②経過の段階に重点があるもの。「むかう」「とおる」の類

～ている：進行, ～ていく：○, ～を：○

③到着の段階に重点があるもの。「つく」「とどく」の類

～ている：結果, ～ていく：×, ～を：×

④移動の全過程をあらわすもの。「いく」「はいる」の類

～ている：結果(進行), ～ていく：○, ～を：○ (p.203-205)

「経過点」(本稿でいう経路地)を示す「(場所)を」とともに用いられるのは、②「経過」型と④「全体」型である。②と④の違いは、「～ている」の形において、②の動詞が「進行」を示すのに対し、④の動詞が主として「結果」を示す(「進行」を示す場合もある)ことである。

②「経過」型の動詞は、2つのグループに下位分類されている。

a) 方向性のつよいもの —— 「めざす」「むかう」など。

b) 方向性のよわいもの —— 「とおる」「わたる」など。

a) と b) とを分ける理由は、a) は「～へ (に)」という目的地をあらわす目的語をとることが多い、b) は「移動の径路をしめす「～を」という目的語とともにもちいられることが多く、目的地・到着点の「～へ (に)」をとることは少ない」ということである。

a) に分類される動詞としては、『めざす』『むかう』以外に『近づく』が挙げられており、b) に分類される動詞としては、『とおる』『わたる』以外に『こえる』『つたう』『よこぎる』が挙げられている (p. 207-209)。

一方、④「全体」型の動詞 (『いく』『くる』『のぼる』『はいる』『すすむ』『おちる』『でる』『うつる』『かえる』『もどる』『のる』など) は、「～ている」の形が「進行中の状態も、結果も、両方あらわすもの」 (『のぼる』『すすむ』『おちる』など、本稿では仮に「全体＝過程／結果型」と呼ぶ) と、「原則として結果だけをあらわすもの」 (『いく』『くる』『はいる』『でる』『うつる』『かえる』『もどる』『のる』、本稿では仮に「全体＝結果型」と呼ぶ) とに下位分類されている (p. 209-211)。

『あるく』は、「～ている」の形でおもに進行中の状態をあらわす、「～ていく」の形がある、経過点をあらわす「～を」という目的語をとる」という点から「とおる」「わたる」などにちかい。」とされてはいるが (p. 311)、この四分類からは排除されている⁵⁾。

3. 分類結果の比較

3.1. 異なる基準に基づく分類結果の類似性

1. の構文特性に基づく各動詞の性格付けの結果と、奥田(1968-72)の分類結果・宮島(1972)の分類結果とを照合してみる。

3.1.1. 経由 (+範囲) = 到着性動詞と奥田(1968-72)の分類結果・宮島(1972)の分類結果

1. では『いく』『もどる』『すすむ』『のぼる』『おりる』を経由 (+範囲) = 到着性動詞とした。

さて、奥田(1968-72)で (イ)「うつりうごくところをあらわす連語」をつくる動詞のうち (A)「移動動作を方向性という観点からとらえている」動詞として挙げられているのは、次の動詞である (以下、便宜上引用者による下線を付す)。

いく、くる、もどる、のぼる、あがる、おりる、くだる、まわる、まがる、すすむ、むかう
一方、宮島(1972)の「全体」型に挙げられているのは次の動詞である。

いく、くる、のぼる、はいる、すすむ、おちる、でる、うつる、かえる、もどる、のる
すなわち、『いく』『もどる』『すすむ』『のぼる』は、三種類の基準による分類結果のいずれにおいても、同じグループに入っている。1. で移動の中間段階を示しうる動詞とした『のぼる』は、宮島(1972)の「全体」型の下位分類では、全体＝過程／結果型動詞に入れられている。

3.1.2. 経由（一範囲）＝到着性動詞・経由（一範囲）性動詞と奥田(1968-72)の分類結果・宮島(1972)の分類結果

1. では、『わたる』を經由（一範囲）＝到着性動詞、『とおる』を經由（一範囲）性動詞とした。さて、奥田(1968-72)で（ロ）「とおりぬけるところをあらわす連語」をつくる動詞として挙げられているのは、以下の動詞である。

とおる、わたる、こえる、ぬける、すぎる、へる、よこぎる

一方、宮島(1972)の「経過」型のうち「方向性がよわいもの」に挙げられているのは以下の動詞である。

とおる、わたる、こえる、つたう、よこぎる

すなわち、經由（一範囲）性を持つ動詞『わたる』『とおる』は、奥田(1968-72)分類・宮島(1972)分類双方において同じグループに入っている。

3.2. 分類結果の類似性が意味するもの

3.1.では、①『いく』『もどる』『すすむ』『のぼる』が、構文特性による分類・奥田(1968-72)の分類・宮島(1972)の分類という三種類のどの結果においても、同じグループ（順に、經由（＋範囲）＝到着性動詞・「うつりうごくところをあらわす連語」をつくる動詞・「全体」型）に入っていること（このうち移動の中間段階を示しうる動詞『のぼる』は、宮島(1972)の「全体」型のうち全体＝過程／結果型動詞に含まれる）、②『わたる』『とおる』が、經由（一範囲）性を持つ動詞（經由（一範囲）＝到着性動詞および經由（一範囲）性動詞）・奥田(1968-72)の「とおりぬけるところをあらわす連語」をつくる動詞・宮島(1972)の「経過」型に入っていること、を見た。

1. の構文特性による分類は、「（場所）を」（經由地）、「（場所）まで」、「（場所）に」（到着地）とともに用いられうるかどうかという、場所を表す名詞の特定の格との結合の有無を根拠にした。奥田(1968-72)の「うつりうごくところをあらわす連語」をつくる動詞・「とおりぬけるところをあらわす連語」をつくる動詞という分類は、「かざり名詞のさしだす場所の範囲のなかで移動動作がおこなわれる」・「ある空間を移動動作が通過することを表現している」という意味の違い、あるいは示される移動そのものの違いを根拠としている（2.1.の引用部分を参照）。宮島(1972)の「全体」型（全体＝結果型・全体＝過程／結果型）動詞・「経過」型動詞の分類は、「～している」という形式が示すアスペク的な意味の違いを根拠としている（2.2.参照）。

異なる基準に基づく、三種類の分類結果である各グループの主要なメンバーが共通していることから、同じグループに入っている動詞（A：經由（＋範囲）＝到着性動詞・「うつりうごくところをあらわす連語」をつくる動詞・「全体」型動詞、B：經由（一範囲）性を持つ動詞（經由（一範囲）＝到着性動詞・經由（一範囲）性動詞）・「とおりぬけるところをあらわす連語」をつくる動詞・「経過」型動詞）の語彙的意味に、何らかの大きな共通の特性があり、それが三種類の分類基準をこえて、現象としての動詞の具体的文脈におけるふるまいのどれにも現れていると推定できる。

4. 分類基準の対比から何が明らかになるか

4.1. 構文特性による分類と奥田(1968-72)分類——構文論的結合関係における動詞の語彙的意味の現れ

構文特性による分類結果と、奥田(1968-72)の分類結果のそれぞれにおいて、『いく』『もどる』『すすむ』『のぼる』『おりる』が一つのグループ(経由(+範囲)=到着性動詞と「うつりうごくところをあらわす連語」をつくる動詞)に入っていること、また一方で、『わたる』『とおる』が経由(-範囲)性を持つ動詞(経由(-範囲)=到着性動詞と経由(-範囲)性動詞)と「とおりぬけるところをあらわす連語」をつくる動詞のメンバーであることについては、次のように考えることができる。

1. では、動詞が「(場所)まで」と結合可能であるかどうかは、その動詞の語彙的意味が移動範囲を問題にできるかどうかの現れであるとした。一方、3.2.でも見たように、2.1.の「うつりうごくところをあらわす連語」をつくる動詞と、「とおりぬけるところをあらわす連語」をつくる動詞という分類は、「かざり名詞のさしだす場所の範囲のなかで移動動作がおこなわれる」と、「ある空間を移動動作が通過することを表現している」という、意味的な違い、あるいは示される移動の違いを根拠としている。経由地の範囲すべてを移動しない可能性があるとするれば、移動範囲を問題にする必要が生じる場合があり、その移動範囲は「(場所)まで」によって示されることになる。これに対して、移動が行われる際には、必ず経由地の最初から最後まで移動する、つまりその経由地を「通過する」とすれば、移動範囲を問題にする必要もなく、「(場所)まで」によって移動範囲を示す必要もない。つまり、移動範囲を問題にする場合があるか、それとも、移動範囲を問題にしないか、という動詞の語彙的意味の違いが、「(場所)まで」と結合可能な動詞であるか(経由(+範囲)性を持つ)、それとも、「(場所)まで」と結合しない動詞であるか(経由(-範囲)性を持つ)という結合の有無の違いとして現れている。

4.2. 宮島(1972)分類の基準から得られる「過程性」と「結果性」

宮島(1972)の分類結果が他の二種類の分類結果と共通点を持つことについてはどう考えればよいだろうか。

宮島(1972)では、分類の形式的根拠が明確に提示されている。「全体」型(全体=結果型と全体=過程/結果型)と「経過」型を分けている基準をまとめる。

		(場所)を(経由地)	~している	~していく/くる
全体型	全体=結果型	○	結果	○
	全体=過程/結果型	○	進行/結果	○
経過型		○	進行	○

表3：宮島(1972)の「全体」型と「経過」型の分類基準

この基準は、空間移動を表す動詞の語彙的意味のどんな特性を明らかにしているのだろうか。

第一に、「(場所)を」とともに用いられ、その「(場所)を」に経由地の意味を与えることであるが、これについては、1. で既に考察した。「全体」型(全体=結果型・全体=過程/結果型)・「経過」型のいずれの動詞も経由性を持っている。

第二に、「～している」という形式が移動の「進行」すなわち継続中の移動(移動の過程)を示すか、それとも移動の「結果」(結果状態)を示すか、ということについてである。「～している」という形式が示すのは継続のみであり、ある動詞の「～している」という形式が動作の継続を示すか、それとも動作の結果状態を示すかを定めるのは、その動詞の語彙的意味の特性である(奥田(1977)の「主体の動作」を表す動詞と「主体の変化」を表す動詞との区分を参照)。過程のある主体の動作を表す動詞によって示される事象のうちで継続する部分は過程の部分であり、結果をとともなう主体の変化を表す動詞によって示される事象のうちで継続する部分は結果状態の部分である、と言えるだろう。本稿では、「～している」のようなアスペクトと関係ある形式で用いられた場合に明らかになるその動詞の語彙的意味の特性を便宜上「アスペクト特性」と呼び、「～している」が動作の継続を示す背景となるアスペクト特性を「過程性」、「～している」が結果状態を示す背景となるアスペクト特性を「結果性」と呼ぶことにする。

第三に、「～していく/くる」についてであるが、この形式は、空間移動を表す動詞の場合には、その動詞が示す移動に(話し手との関係における)方向を与える、あるいは、その方向を明示するために用いられる、と言える。経由性を持つ動詞であれば、どんな動詞であっても、方向を明示するために「～していく/くる」という形式で用いることが可能であろう。そうだとすれば、「～していく/くる」という形式をとりうるかどうかは、本稿では基準としてとりあげる必要がなくなる。

宮島(1972)の基準による「全体」型(全体=結果型・全体=過程/結果型)・「経過」型という語彙的意味の性格付けを、以上の観点からまとめなおしてみる。

		経由性	過程性	結果性
全体型	全体=結果型	○		○
	全体=過程/結果型	○	○	○
経過型		○	○	

表4：宮島(1972)の「全体」型と「経過」型の特性の再構成

宮島(1972)によるアスペクト特性の分布を、構文特性に基づく分類結果と照合してみる。

第一に、宮島(1972)で全体=結果型動詞とされている動詞のうち、本稿でとりあげているのは『いく』『もどる』である。これらは結果性を持つとされる。構文特性から見ると、『いく』『もどる』は経由(+範囲)=到着性動詞である。

第二に、宮島(1972)で全体=進行/結果型動詞とされている動詞のうち、本稿でとりあげているのは『すすむ』『のぼる』である。これらは過程性・結果性両方を持つとされる。構文特性から見ると、『すすむ』『のぼる』は経由(+範囲)=到着性動詞である。

第三に、宮島(1972)で「経過」型動詞とされている動詞のうち、本稿でとりあげているのは『わたる』『とおる』である。これらは過程性を持つとされる。構文特性から見ると、『わたる』は經由（－範囲）＝到着性動詞、『とおる』は經由（－範囲）性動詞である。

到着性を持つ動詞のうち『いく』『もどる』『すすむ』『のぼる』（どれも經由（＋範囲）＝到着性動詞である）は、結果性を持つ動詞である。本稿でとりあげている範囲の空間移動を表す動詞では、到着性を持つ動詞と、結果性を持つ動詞とが重なっている⁶。

また、『のぼる』（經由（＋範囲）＝到着性動詞）『わたる』（經由（－範囲）＝到着性動詞）『とおる』（經由（－範囲）性動詞）という、構文特性から見ると互いに異なるが、移動の中間段階を示す用法がある動詞（例32, 34, 35参照）は、どれも過程性を持つ動詞である。

5. 語彙的意味の特性の補足

空間移動を表す動詞の語彙的意味の特性として、1. では經由性（經由（＋範囲）性および經由（－範囲）性）・到着性という構文特性を、4.2.では結果性・過程性というアスペクト特性を設定した。次に、具体的な調査の最初として、1. で見た動詞のうち、具体的な文脈における特徴的なふるまいを期待できる動詞『あるく』を見ておく。『あるく』は、移動方法という、空間移動という事象の特定の側面をとりだしており、それゆえ、他の空間移動を表す動詞には見だしにくい、極端なふるまいが期待できる（注2, 注5も参照）。『あるく』の具体的な文脈におけるふるまいから、これまでに設定した他に、本稿の目的のために有効な動詞の語彙的意味の特性があるかどうかを考察する。

5.1. 『あるく』の分析

『あるく』は、場所を表す名詞とともに用いられない場合には、例36, 37のように、どこからどこへの、どこを經由しての移動であるか、ということは問題ではなく、運動そのものが問題になる。

36) たぶん気分が悪いのだろう。ふらつくようなところはなかったが、歩くだけで精一杯なのかもしれない。(丘の上の向日葵・26)

37) 右手に冷凍食品のずっしりと重い袋を提げ、左手にはパンの入った方を抱くという形になった。歩くのに骨が折れる。(恍惚の人・5)

しかし、「(場所)を」とともに用いられる場合には、一定の場所を經由する移動を示す。

38) 雪のあとで薄泥で掩われた道を、遺族たちは黙々として歩いた。(恍惚の人・62)

『あるく』は、場所を表す名詞とともに用いられた場合には、經由（＋範囲）性動詞となる（例38および例8『板橋駅まで あるく』から）。『あるく』は、潜在的にはあるとしても、經由（＋範囲）性を持つ動詞である。

一方、1. でも見たように、「(場所)に」とともに用いられることは不可能ではないとしても、あまり自然な用法ではない（例20参照）。『あるく』は到着に関しては無関心である。「あるいている」が到着地における滞在を示すこともない。『あるく』は到着性・結果性を持たず、文脈によ

て与えられることも困難である。

「あるいている」という形式は、場所を表す名詞を伴わない場合(例39)でも、「(場所)を」(經由地)とともに用いられている場合(例40)でも、常に移動の過程を示す。『あるく』は常に過程性を持っている。

39) 急いだつもりだったが、実はひざががくがくとして、よそ目にはひどくのろのろと歩いているように見えた。(塩狩峠・139)

40) 二人は繁華街を映画館のほうへ歩いていた。(雲の宴・上・70)

さて、『あるく』の特徴的な用法の一つとして、移動距離を示す名詞(句)とともに用いられる場合には、「(場所)を あるくと」の後に、その移動距離が終了した場所の描写が続けられる、という用法が挙げられる(移動全体が終わるかどうかは明示されない)。

41) 通りを二百メートルほど歩くと、左手に青い金網張りの巨大な鳥籠のような建造物が暗い雨空にそそりたっていた。(雲の宴・上・93)

42) ……細道を十間ほど歩くと、入母屋造りの大きな家が現れた。(山牝・上・20)

移動距離を示す名詞(句)とともに用いられない場合には、「あるくと」の後に何らかの場所の描写が続けられることはない。あとに続くのは移動主体の状態変化を示す表現などである。

43) 「そうだね。おばあさまは外を歩くと、すぐくたびれるものね。……」(塩狩峠・29)

「あるきながら」という形式は、動詞によって示される動作・状態と同時に行われる移動を示す。

44) クレゾールの臭いの漂う白い廊下を歩きながら彼は悲しい気持になった。(悪霊の午後・上・29)

45) 廊下を歩きながら、私はすごく緊張した。(きらきらひかる・143)

5.2. 「タクシス特性」としての「完結性」

5.1.では、『あるく』の具体的文脈における特徴的なふるまいとして、

①移動距離が明示された場合に、「(場所)を あるくと」の後に、その移動距離が終了した場所の描写が続きる

②「(場所)を あるきながら」という形式で、文末の動詞によって示される動作・状態と同時に行われる移動を示す

の二点を見た。これらの事実から、『あるく』の語彙的意味のどのような特性が明らかにできるだろうか。

①について言えば、「～すると」は、もう一つの(文末の)動詞によって示される事象に対する先行性を示す語形である(奥田(1986) p.11-14, および城田(1998) p.82「前提を示す接続助詞ト」参照)。「～すると」に続いてその終点(移動全体の終点つまり到着地であるかどうかは別に)が描写されるのは、その移動の經由地に終点がある場合だと言える⁷。移動の經由地に終点がある、つまり、その動詞によって示される移動が完結するということである⁸。動詞の語彙的意味の特性について言えば、移動距離を明示する名詞(句)がともに用いられない場合でも完結する移動を示すのであれば、動詞の語彙的意味が「完結性」を持つ、ということが明らかになる。『あるく』は移

動距離を明示する名詞（句）がともに用いられた場合に限って「あるくと」に続いて終点の描写がされるのであるから、『あるく』自体の語彙的意味は完結性を持っていない^{9,10}。二つの事象の時間的關係は「タクシス」という用語で呼ばれる場合がある¹¹。「完結性」は、アスペクトに関する形式からだけでは、その存在を確認しにくい場合もある。そこで、以下では「完結性」を便宜上「タクシス特性」と呼ぶ¹²。

②について言えば、他の動作・状態と同時に行われるためには、「～ながら」という形式で用いられる動詞の語彙的意味が継続的な事象を示しうるものでなければならないだろう。しかし、継続的であっても、動作の継続つまり過程でなければ、「～しながら」は単なる同時性を示すわけではない（例えば城田(1998) p. 284の逆接の意味を持つ「狭いながら（も）」「子供ながら（も）」「読めないながら（も）」の例を参照）。「～しながら」という形式で文末の動詞によって示される動作・状態と同時の動作を示すことは、その動詞の語彙的意味が過程性を持つ現れであると言える。過程性を持つ動詞であることの根拠として「～している」という形式の用法（移動の過程）を挙げたが、アスペクト特性という言い方をしても、過程性が、タクシスを示す形式において現れることを排除しない。

『あるく』の語彙的意味の特性を改めて記述してみると、「（場所）を」とともに用いられる場合に經由（+範囲）性動詞であり、過程性を持つが、到着性・結果性・完結性は持たない、となる。

なお、「完結性」について付け加えて言えば、到着地は移動全体の終点であるので、到着性を持つ動詞は必然的に完結性を持つ。例えば、典型的な到着性動詞である『つく』¹³は、「（場所）につくと」の後に到着地の描写が用いられうる。

46) 会場の料亭につくともう新聞社やテレビの人たちが待機していた。(悪霊の午後・上・10)

6. アスペクト特性・タクシス特性を加えた各動詞の性格付け

1., 4.2., 5.2.では、空間移動を表す動詞の語彙的意味の以下の特性を設定した。

I) 構文特性

- i) 經由性：「（場所）を」と結合し、その「（場所）を」に經由地の意味を与える
 - a) 經由（+範囲）性：移動範囲の終点を示す「（場所）まで」とも結合する（移動範囲を問題にできる）
 - b) 經由（-範囲）性：「（場所）まで」とは結合しない（移動範囲が問題にならない）
- ii) 到着性：「（場所）に」と結合し、その「（場所）に」に到着地の意味を与える

II) アスペクト特性

- i) 過程性：「～している」という形式が移動の過程を示す
- ii) 結果性：「～している」という形式が結果状態としての到着地における滞在を示す

III) タクシス特性

完結性：「～すると」という形式の後に、終点（到着地とは限らない）の描写が用いられうる（移動全体は終わらなくても、その動詞によって表される移動の部分はその終点で終わる）

以下では、1. で構文特性によってのみ性格付けした各動詞を、さらにアスペクト特性・タクシス特性の観点から、より詳しい性格付けを試みる（アスペクト特性については、基本的に宮島(1972)に示されている性格付け（4.2.参照）の確認を中心とする）。

6.1. 経由（＋範囲）＝到着性動詞

6.1.1. 『いく』『もどる』

『いく』は、構文特性から見ると、経由（＋範囲）＝到着性動詞となる（例1『砂漠を いく』、例9『そこまで いく』、例14『リビングに いく』参照）。また、次の例では、「駅に」に到着地の意味を与え、「道」に経由地の意味を与えている。

47) 二つ先の駅に行く道はいつかあったが、....（丘の上の向日葵・253）
こうした用法で『道』のような名詞に経由地の意味を与えるのも、経由性の現れの一つとっていいだろう。「(場所)に」とともに用いられ、到着性が表面化している場合にも、『いく』の語彙的意味においては、到着性と経由性とが両立していることがわかる。では、「(場所)を」とともに用いられ、経由性が表面化している場合はどうだろうか。「(場所)を」（経由地）とともに用いられる場合でも、「(場所)を いくと」などの形式の後に、あらかじめ予定された場所へではないが、ある場所への到着を示す表現が用いられることが多い¹⁴。次の例48では、『堀の際に つく』が『地面を いく』の到着の部分で補っている。

48) 苔の生えたすべりやすい地面を行くと、やがて堀の際に着いた。（異人たちの館・204）
『いく』が具体的な文脈において用いられた場合には、ある場所への到着によって終わる移動を示すのが普通である、と言える。また、到着性を持っているので、必然的に完結性も持っている。

さて、「いつている」という形式は、移動の過程を示すことはなく、（結果状態としての）到着地における滞在を示す（宮島(1972) p. 209-210も参照）。『いく』が結果性を持つことが確認できる。到着地であり同時に滞在地である場所を示す「(場所)に」とともに用いられるのが普通である。

49) 主人は海軍で遠い所に行っているそうである。（海と毒薬・45）
『いく』を用いて移動の過程を示そうとすれば、「(場所)に いく途中」のような表現を用いなければならないだろう。

50) 信夫は、美沙との縁談を断りに、いま和倉礼之助の家に行く途中であった。（塩狩峠・263）
「いく途中」という形式を用いることによって、つまり、その意味を明示する形式をともに用いることによって、外的に過程の意味を与えることができることから、『いく』によって示される空間移動は過程と矛盾するものではないが（「つく途中」という表現が考えられない『つく』との比較による）、『いく』自体の語彙的意味は過程性を持っていない。

改めて『いく』を性格付けしてみると、過程性を持たず、完結性・結果性を持つ経由（＋範囲）＝到着性動詞となる。

『もどる』も経由（＋範囲）＝到着性動詞であり（例2『道を もどる』、例10『道まで もどる』、例15『家にもどる』参照）、「もどっている」という形式は「(場所)に」とともに用いられて（結果状態としての）到着地における滞在を示す（宮島(1972) p. 210も参照）。

51) 現在はもう、ドゥムビアは、セレール共和国に戻っているはずだ——郡司は、重い眠りから、目覚めると、そう思った。(雲の宴・上・401)

『もどる』も、『いく』同様、過程性を持たず、完結性・結果性を持つ經由(+範囲)=到着性動詞となる。

なお、『いく』『もどる』ともに、「(場所)を」とともに用いられている場合には、「～しながら」という形式で文末の動詞と同時に行われる移動動作を示すことが、「(場所)にいきながら/もどりながら」ほど不自然ではないだろう。經由地が明示されて經由性が強調される場合には、過程性を持つ余地が生じることが推定される。

52) 裏手にある中庭の渡り廊下を小走りに行きながら財布の中のテレホンカードを捜した。(丘の上の向日葵・197)

53) 帰り路、あのネギ畠を戻りながら、ぼくはこの一年の間、自分に屈辱感を与えていたもの、あの子の嘲笑から抜けでられると思った。(海と毒薬・110)

6.1.2. 『すすむ』

『すすむ』は、構文特性から見ると、『いく』同様、經由(+範囲)=到着性動詞である(例3『廊下をすすむ』、例11『ドア近くまですすむ』、例16『ドアにすすむ』参照)。「(場所)をすすむと」の後に、結果としての到着を示す表現が用いられることが多い点も『いく』と共通している。

54) ……受付でいわれた通りに廊下をすすむと、すぐ人の通りは減って、内科の受付に出た。(丘の上の向日葵・285)

『すすむ』も、『いく』同様、具体的な文脈において用いられた場合に、到着によって終わる移動を示すことが多い。また、到着性を持っているので、完結性を持ち合わせている。

ここまでは、『すすむ』は完結性を持つ經由(+範囲)=到着性動詞である。『いく』との対比において、『すすむ』の具体的な文脈におけるふるまいとして注目できるのは、「すすんでいる」という形式が、用いられる文脈に応じて、到着地における滞在を示す場合だけでなく、移動の過程を示す場合もある、という点である。

○十七日、古川、小牛田に進んでいた先鋒の二枝隊を追って、

○船は坂手島を左に見て進んでみた。

(宮島(1972) p. 209の例、下線・太字は引用者)

第二の例は、「(場所)を」が省略されていると考えられる。また、「(場所)をすすみながら」も、文末の動詞によって示される動作と同時に行われる移動を示すことができる(例52「渡り廊下をいきながら」、例53「ネギ畠を戻りながら」に比べてさらに自然な表現だろう)。

55) 孝平は信江に背を向け、家の方へ歩きはじめた。信江はペダルを踏み、すぐ追いついて道をゆっくりじぐざぐに進みながら、孝平の歩調に合わせた。(丘の上の向日葵・306)

『すすむ』は、「(場所)を」(經由地)とともに用いられ、經由性が強調される場合には過程性が表面化し、「(場所)に」(到着地)とともに用いられ、到着性が強調される場合には結果性が表

面化する。『すすむ』は、過程性・結果性・完結性を持つ經由（+範囲）＝到着性動詞となる。

6.1.3. 『のぼる』『おりる』

『のぼる』『おりる』は、構文特性から見ると、『いく』『もどる』『すすむ』同様、經由（+範囲）＝到着性動詞である（例4『坂道を のぼる』、例12『三階まで のぼる』、例17『屋上に のぼる』；例5『石段を おりる』、例13『ロビーまで おりる』、例18『食堂に おりる』参照）。また、宮島(1972)に挙げられている次の例では、「二階へ」によって到着地が示され、「階段」によって經由地が示されている。

○その前から二階へ登る緩い階段が見上げられる。(宮島(1972) p. 526の例、下線は引用者)
この例は「(場所)に」が用いられているわけではないが、到着地が明示される場合でも、經由性を持ち合わせている。『のぼる』の語彙的意味においても、到着性と經由性とが矛盾なく両立し、「(場所)に」をともなって到着地が明示され到着性が表面に出ている場合にも經由性を持ち合わせていることが推定できる（例47『駅に 行く 道』参照）。

『いく』および『すすむ』の具体的文脈におけるふるまいと比較して『のぼる』『おりる』について注目できるのは、既に1. で見た、さらに続いていく移動の中間の段階を示す用法、つまり、到着によって終わらない移動を示す用法である。

56) 孝平ははじめて自分のつくったスロープをのぼって二人の家に入った。(丘の上の向日葵・168)

32) その発音は階段をゆっくりと登ると、この手術室の方向に進んでくる。(海と毒薬・153)

33) 「でも遠いんです。坂を上っておりて、もう一つ坂をのぼって丘の上」(丘の上の向日葵・20)

『のぼる』『おりる』は「(場所)に」に到着地の意味を与えることができるとしても、具体的文脈においては、常に到着によって終わる移動を示すわけではない。「(場所)に」とともに用いられた場合に初めて到着によって終わる移動であることを明示するという点に注目すれば、『のぼる』『おりる』の語彙的意味自体に到着性が固有であるのではなく、「(場所)に」とともに用いられるという文脈、つまり構文論的条件によって、到着性を持つようになる、と言える¹⁵。

例32では移動全体のうちの『階段を のぼる』によって示される部分が終了した場所から、次の移動が続く。また、次の例57では、「階段を おりると」の後に、『階段を おりる』によって示される移動の部分が終了した場所の描写が続いている。

57) 階段を下りると、第一船倉の、リベットを打った鉄の障壁が立ちはだかっていた。(雲の宴・上・422)

必ずしも到着によって終わる移動を示すわけでもなく、「(場所)を のぼると」「(場所)を おりると」の後に、示されている移動が終了した場所の描写、あるいはそこから別の方向の移動が続くことを示す表現が用いられうることから、『のぼる』『おわる』によって示される移動には終点があり、その語彙的意味は完結性を持っていることがわかる。その終点で移動全体が終了すれば、そこが到着地となり、『のぼる』『おりる』は到着によって終わる移動を示すことになる。完

結性を持つことが、「(場所)に」とともに用いられた場合に到着性・結果性を持つようになる基盤であろう。

『のぼる』『おりる』の具体的文脈におけるふるまいで他に注目できるのは、「のぼっている」「おりている」の用法である。宮島(1972)は、「のぼっている」が「結果」すなわち到着地における滞在を示す場合と「進行」すなわち移動の過程を示す場合とがあることを指摘している。

○何だつてそんなところに登つてゐるんだ。早くおりておいで。(「結果」を示す例)

○急ぎ足で坂を登つてゐるとき。(「進行」を示す例)

(宮島(1972) p. 209の例, 下線・太字は引用者)

宮島(1972)の例では、「(場所)に のぼっている」が到着地における滞在を示し、「(場所)を のぼっている」が移動の過程を示している。『のぼる』は、「(場所)に」とともに用いられ到着によって終わる移動を示している場合(つまり到着性を持つようになった場合)には結果性を持つようになり、経由地が明示され移動の中間の段階が強調される場合には過程性が表面化する。「(場所)を」とともに用いられた場合に過程性が表面化することは、「(場所)を のぼりながら」が自然な用法として文末の動詞によって示される動作・状態と同時に行われる移動を示すことによっても確認できる。

4) 信夫は坂道をのぼりながら, 珍しそうに行き交う人を眺めた。(塩狩峠・25)

『おりる』も、『のぼる』同様、「(場所)に」とともに用いられている場合には結果性を持ち(例58)、「(場所)を」とともに用いられている場合には過程性が表面化する(例59, 60)。

58) そよちゃんとはつくに起きて階下におりている。(流しのしたの骨・137)

59) 見るともう信江は家とは反対側に出る階段をおりている。(丘の上の向日葵・213)

60) 郡司は、ポケットの中に拳銃を入れ、タラップを下りながら, そうつぶやいた。(雲の宴・下・41)

以上から『のぼる』『おりる』を性格付けすると、場所を表す名詞の格との結合関係に応じて、到着性・結果性を持つ場合と、過程性が表面化する場合とがある、完結性を持つ経由(+範囲)性動詞となる。

6.2. 経由(一範囲) = 到着性動詞『わたる』

構文特性によって『わたる』を性格付けすると、経由(一範囲) = 到着性動詞となる(例6『車道をわたる』例19『北海道にわたる』参照)。「(場所)まで」との結合が考えにくい『わたる』は、移動範囲が問題にならない動詞であると言える。『わたる』によって示される移動が行われるときには、経由地の最初から最後まで移動が行われるのが普通であろう¹⁶(4.1.参照)。

『わたる』の具体的文脈におけるふるまいで注目できるのは、『のぼる』『おりる』同様、既に1. で見たように、移動の中間の段階を示す用法、つまり、到着によって終わらない移動を示す用法である。

34) 二つ先の駅に行く道はいくつかあったが、常識的には駅前に出て陸橋を渡り, 大きな団地脇を西に進むことになる。(丘の上の向日葵・253)

61) 陸橋を渡って時々寄る日曜大工の店に入った。(丘の上の向日葵・130)

『わたる』も、『のぼる』『おりる』と同じく、動詞の語彙的意味自体には到着性は固有ではなく、「(場所)に」とともに用いられる場合に到着性を持つようになる。手持ちの例では見られなかったが、「(場所)を わたると、そこは/そこには/そこでは ……」は十分可能な文だろう。『わたる』の語彙的意味も完結性を持っていて、その完結性が『(場所)に わたる』という形で到着性を持つようになる基盤であると考えられる。

例19では、「北海道に わたって」に続いて、到着地における主体の動作が示される。つまり、到着地=滞在地において主体の次の動作が行われることになる。この事実から、『わたる』が「(場所)に」とともに用いられ、到着によって終わる移動が示された場合(つまり到着性を持った場合)には、結果性を持つようになることが推定される(奥田(1989) p. 21-22参照)。

一方、「(場所)を」とともに用いられ、経由地が明示されることによって移動の中間の段階が強調される場合には、過程性が表面化する。

○ほかの話題が見つからぬままで彼らは四ツ木橋を渡っていた。

(宮島(1972) p. 209の例, 下線・太字は引用者)

62) 橋を渡りながらバルバリゴは、国外勤務が長いとこれを渡る感覚だけは忘れる、と、苦笑しながら思った。(レパントの海戦・18)

以上から『わたる』を性格付けすると、場所を表す名詞の格との結合関係に応じて、到着性(結果性も)を持つ場合と、過程性が表面に出る場合とがある、完結性を持つ經由(一範囲)性動詞となる。

6.3. 經由(一範囲)性動詞『とおる』

『とおる』はほとんど常に「(場所)を」(経由地)とともに用いられる(例7『窓のすぐそばをとおる』, および注1, 注3参照)。「(場所)まで」と結合しないことから、『とおる』にとっては移動範囲は問題にならないことがわかる。また、「(場所)に」と結合しないことから、『とおる』は到着性を持たないことがわかる。『とおる』は經由(一範囲)性動詞である。

『とおる』の具体的文脈における特徴的なふるまいの一つとして、既に1. で見たように、「(場所)を とおって」という形式で用いられ、その後に移動がさらに継続していくことを示す表現が続く、という用法がある。

35) 私はまだ湿っているおばあさんの下駄を突っかけると、庭を通って外の門のところまで行った。(ポプラの秋・44)

63) 犬のいる家の前を通ってマンションの角を右に曲がると、二十数年間住んだ家だ。(きらきらひかる・172)

64) 琴と豊は雪囲いの奥の玄関口から入り、厩の前を通って、暗い土間に入っていった。(山坳・上・119)

この用法も到着性を持たないことの現れである。

また、「とおっている」という形式は、常に移動の過程を示す(宮島(1972) p. 209も参照)。

65) 「君らは違法のルートを通っている」(雲の宴・下・60)

『とおる』は過程性を持ち、結果性を持たない。到着性を持たないことと、結果性を持たないことが対応している。また、「(場所)を とおると、そこは/そこには/そこでは ……」という文は考えられず、このような用法がないとすれば、『とおる』は完結性を持っていないことになり¹⁷⁾、到着性の基盤となる完結性を持たないことから、到着性を持ちえないことも説明できる(6.1.3. 『のぼる』『おりる』および6.2. 『わたる』参照)。

以上から『とおる』を性格付けすると、過程性を持つが、到着性・結果性・完結性を持たない經由(一範囲)性動詞となる。

7. 結果と考察

7.1. 各動詞の語彙的意味の特性のまとめ

6. (『あるく』は5.1.) で見てきた動詞の語彙的意味の特性をまとめてみる(次ページの表5、特性の配列は暫定的なもの)。各特性の下にその形式的根拠を記す。3. で見た奥田(1968-72)の分類結果、宮島(1972)の分類結果を併記する(奥田(1968-72)の分類結果は構文特性との対比のため左に、宮島(1972)の分類結果はアスペクト特性との対比のため右に記す)。

7.2. 語彙的意味の特性に基づく動詞の相互関係

これまで設定してきた特性に基づいて、動詞の相互関係を考察する。

①經由性：『いく』『もどる』『すすむ』『のぼる』『おりる』『わたる』『とおる』『あるく』すべてが經由性を持っている(ただし『あるく』は「(場所)を」とともに用いられた場合)。これによって經由性を持たない『つく』などと区別される。このうち『いく』『もどる』『すすむ』『のぼる』『おりる』および『あるく』は移動範囲を問題にでき、『わたる』『とおる』は移動範囲が問題にならない。

②到着性：『いく』『もどる』『すすむ』は到着性を持ち、『のぼる』『おりる』『わたる』は「(場所)に」とともに用いられた場合に到着性を持つようになり、『とおる』『あるく』は到着性を持ちえない。

③完結性：『いく』『もどる』『すすむ』は到着性を持つため必然的に完結性を持ち、『のぼる』『おりる』『わたる』は完結性を持っていて到着性を持つ基盤となり、『とおる』『あるく』は完結性を持たない。

④結果性：『いく』『もどる』『すすむ』は結果性を持ち、『のぼる』『おりる』『わたる』は「(場所)に」とともに用いられた場合に結果性を持つようになり、『とおる』『あるく』は結果性を持ちえない(到着性と対応する)。

⑤過程性：『いく』『もどる』は過程性を持たず、『すすむ』『のぼる』『おりる』『わたる』は經由性が強調される場合に過程性が表面化し、『とおる』『あるく』は常に過程性を持つ。

	奥田 (1968-72) の分類結 果	構文特性		タクシス特性	アスペクト特性		宮島(1972) の分類結果
		経由性	到着性	完結性	結果性	過程性	
		「(場所) を」に経 由地の意 味を与え る(「(場 所)まで」 と結合可 能なら +範囲)	「(場所) に」に到 着地の意 味を与え る	「~すると」 の後に終 点の描 写が続 きうる	「~してい る」が到 着地にお ける滞 在を示 す	「~してい る」が移 動の過 程を示 す	
いく もどる	「うつり うごく ところ をあら わす連 語」を つくる 動詞 (A)	○ +範囲	○	○	○	-	全体=結 果型
すすむ	「うつり うごく ところ をあら わす連 語」を つくる 動詞 (A)	○ +範囲	○	○	○	○	全体=結 果/ 過程型
のぼる おりる	「うつり うごく ところ をあら わす連 語」を つくる 動詞 (A)	○ +範囲	○/-	○	○/-	○	
わたる	「とお りぬけ るとこ ろをあら わす連 語」を つくる 動詞	○ -範囲	○/-	○	○/-	○	「経過」型
とおる	「とお りぬけ るとこ ろをあら わす連 語」を つくる 動詞	○ -範囲	-	-	-	○	
あるく	「うつり うごく ところ をあら わす連 語」を つくる 動詞 (B)	○/- +範囲	-	-	-	○	

表5：各動詞の語彙的意味の特性一覧^{18,19}

7.3. 各動詞の結合相手である「(場所)を」によって示される経由地の違い

最後に、移動範囲を問題にできるか、終点があるか、到着地があるか(到着地は終点の一種だが、終点は到着地とは限らない)という観点から、0. で経由地とした「(場所)を」によって示される場所が、結合相手の動詞の語彙的意味の特性に応じてどう違うかを見る。

- ①『いく』『もどる』の経由地：移動範囲を問題にでき、到着地がある経由地
- ②『すすむ』の経由地：移動範囲を問題にでき、到着地がある経由地(①と同じ)
- ③『のぼる』『おりる』の経由地：移動範囲を問題にでき、終点(到着地である場合も到着地でない場合もある)がある経由地
- ④『わたる』の経由地：移動範囲が問題にならない、終点(到着地である場合も到着地でない場合もある)がある経由地

⑤『とおる』の經由地：移動範囲を問題にしない、終点に無關心な經由地
最後に、⑥として、「(場所)を」などとともに用いられ、空間移動を表す場合の『あるく』の經由地は、移動範囲を問題にできる、移動距離を示す名詞(句)あるいは「(場所)まで」とともに用いられた場合に終点を持つ經由地、となる。

注

- 1 例えば宮島(1986)によれば、『とおる』は、29例中、「(場所)から」(出発点)との結合2例、「(場所)を」(経過点)との結合22例である。また、『わたる』は、25例中、「(場所)に」(到着点)との結合8例、「(場所)へ」(到着点)との結合4例、「(場所)から」(出発点)との結合1例、「(場所)を」(経過点)との結合12例である(宮島(1994) p. 441, 出発点・経過点・到着点は宮島(1986)の用語)。
- 2 宮島(1984)は、『あるく』を、『はしる』『およぐ』『とぶ』とともに、「移動法をあらわす運動」と規定し、「駅へ あるいは。」「むこうぎしに およいだ。」などの文をつくることを「まったくできないとはいえないにしても、きわめてむずかしい。」としている(宮島(1994) p. 56-57)。なお、宮島(1986)によれば、『あるく』は、107例中、「(場所)に」(到着点)との結合2例、「(場所)まで」(到着点)との結合2例、「(場所)から」(出発点)との結合2例、「(場所)を」(経過点)との結合36例である(宮島(1994) p. 441)。
- 3 宮島(1972)には、「咽喉から下へは極僅しか通らなかつた」(p. 208, 下線は引用者)という例が挙げられている。しかし「下へ」は方向を示していて到着地ではない。
- 4 語彙的意味の特性はしばしば「意味特徴」と呼ばれる。「意味特徴」という用語によって、その語の純粋に意味的な面をとりだしたものが言及される場合がある(たとえば石綿敏雄(1999) p. 142~, 一般言語学的にはLyons(1977) p. 317~)。本稿では、具体的文脈におけるその語のふるまいに現れる語彙的側面に注目した。
語彙的意味のこのような側面は、日本語については、奥田(1968-72)でまず指摘されている。ここでは、たとえば『(物)を ~する』(「もようがえのむすびつき」)という結合をつくる動詞と、『(物)を (物)に ~する』(「とりつけのむすびつき」)という結合をつくる動詞をとりだし、その違いが「語彙的な意味の性格」の上に成立することが述べられている(言語学研究会編(1983) p. 29-30)。この「語彙的な意味の性格」は、奥田(1974), 同(1976), 同(1980-81)では「カテゴリー的な意味(意味特徴)」と呼ばれている。
- 一方、宮島(1972)は、『まちへ かえる』という結合を例に、「まちへ」と結合するという「文法的条件」が、『かえる』の「語彙的意味の形式的側面」を明らかにし、それが『かえる』の「移動」という「範ちゆう的な側面」でもあることを述べている(p. 669-671)。
- 5 宮島(1972)では、『あるく』を、『はしる』『かける』『はう』『ころがる』『すべる』『とぶ』とともに、「ほかの移動の動詞にくらべて、移動としての性格がよわい。」と性格付けしている(p. 311)。
- 6 宮島(1989)は空間移動の結果として到着をとりだし(宮島(1994) p. 418-419), 奥田(1988a)は移動動作の結果状態として「到着地における滞在」をとりだしている(p. 13)。到着性は空間移動を表す動詞に密接に関係する特性であり、結果性は動的事象を示すために用いられる動詞一般に関係する特性である。
- 7 その動詞によって示される動作が完結しているかどうかははっきり現れる場合のひとつとして、二つの事象の時間的關係が問題になるときが挙げられる。奥田(1988b) p. 33-34は、「ふたりのし手

の、ふたつの動作のぶつかりあい」について、「ある動作がほかの動作と時間的な関係を取りむすぶのは、おおくのばあい、その、ある動作が完結したときのことであるか、それとも、これらの動作の内的な時間構造の、ひとつの局面においてである。」と述べている。ある動詞の語彙的意味が動作の完結の段階までを含んでいるのであれば、その動詞が継起性を示す形式で用いられた場合には、もう一つの事象より以前に完結する事象を示すことになる。終点のある移動が先行事象であれば、後続事象の表現として、その終点での出来事・状態を示すことができるだろう。

- 8 動詞が動作の完結の段階までを示すことについては、宮島(1989)の「限界」、奥田(1988a)の「限界への到達」、および、コムリー(1976)の英語動詞についてのtelic/atelic(限界的と非限界的)の議論(山田訳(1988) p.71~)を参照。
- 9 奥田(1988b)の「無限界動詞の限界は、たとえば、「学校まであるく」のように、そとがわからあたえられる。」という記述を参照(p.36)。
- 10 北原博雄(1998)では移動距離・移動期間を表す語句との共起関係という観点から、空間移動を表す動詞の限界性・非限界性が論じられている。
- 11 「タクシス」という用語では、工藤(1995)では「出来事間の時間的な相互関係(同時性-先行性-後続性)」が言及されている(p.22)。また、二つの事象の時間的関係とその表現形式について城田(1998) p.178~では「関連」という用語によって述べられている。
- 12 タクシスに関係する形式を用いて動詞の語彙的意味の特性を導いた例として、言語学研究会・構文論グループ(1989)による、「~したとき」が出来事の「完結」を示すかどうかを利用した分析がある。そこでは、動詞の語彙的意味の特性として「限界性」という用語が用いられているが、本稿では「完結」をそのまま用いた。
- 13 動詞『つく』は、ほとんど常に到着地を示す「(場所)に」とともに用いられ、「(場所)に いる」という形式で用いられた場合には到着地における滞在を示す(例66)。また、「つく途中」のような形式も考えられないことから、他の動詞との併用という場合(例48)を除いては移動の過程を示し得ない、つまりその語彙的意味が過程性と矛盾する(「いく途中」という形式が可能である『いく』と比較)、典型的な到着性動詞である(宮島(1972) p.211も参照)。

66) ... ドン・ホアンがゴルフに着いているはずだから、... (レパントの海戦・242)

経由地を明示するためには次のような方法によらなければならない。

67) オリエント特急(エクスプレス)がドイツとオーストリアの国境を越えてザルツブルクに着いたのは午前十時二十六分。(雲の宴・上・233)

移動の所要時間を明示するというような特殊な文脈においてでもなければ、「(場所)まで」との結合もなく、移動範囲も問題にならない。

68) 赤坂から四谷まで渋滞があったが、運転手は抜け道を選び、市谷の裏町まで三十分ほどで着いた。(雲の宴・上・381)

『つく』の語彙的意味の特性は、経由性：－，到着性：○，結果性：○，完結性：○，過程性：矛盾，となる。
- 14 同じく到着という言い方ができても、例48では、『(場所)に いく』という用法と違い、あらかじめ決めてあった目的地に到着するわけではない。その意味では、例48は、経由性と完結性の相互作用によって成立する到着を示している、と言える。この用法が可能であることは、『いく』と、ほとんど常に「(場所)に」とともに用いられ、目的地への到着が示される『つく』(注13参照)との違いの一つである。
- 15 奥田(1967)は動詞『みる』が『(場所)に (物)を みる』という結合において「発見する」と

いう語彙の意味を獲得することに注目し、そのような語彙の意味を「連語の構造にしばられた意味」と呼んでいる(奥田(1984) p. 8)。

『あるく』が「(場所) まで」とともに用いられることによって終点のある移動を示す場合、『いく』が「いく途中」という形式で用いられて移動の過程を示す場合は、ともに用いられる語句が積極的にある意味を持ち、動詞自体の語彙の意味はその特性を持たないが、矛盾しないために、その意味を持つようになる例である。これに対して、「(場所) に」は、到着地を積極的に表すものではない(目的地を示す場合の例を参照)。「のぼる」「おきる」の語彙の意味に到着性が固有でないとしても、「(場所) に」に到着地の意味が与えられるのは、動詞の側の特性が何らかの役割を果たしているからだろう(ここでは完結性と「(場所) に」との相互作用)。

- 16 「橋を途中までわたったところで、あることに気づいた。」のような文(完結性を持つ移動が途中で中断されることを示す)は可能だろう。

経由(一範囲)⇒到着性動詞(より正確には完結性を持つ経由(一範囲)性動詞)と性格付けできると考えられる動詞には、他に『こえる』『よぎる』『ぬける』などがある(2.1.に引用した奥田(1968-72)の「とおりにぬけるところをあらわす連語」をつくる動詞についての記述、および、以下の例を参照:「飛騨から信州へ越える深山の間道」「四辻を向側へと横ぎってしまったが」(以上、宮島(1972) p. 208の例から、下線は引用者)「階段を下って裏口へ抜けるルート」(異人たちの館・221))。これらの動詞は、経由地の空間的な大きさによっては、範囲を問題にできる余地が生じる可能性があるだろう。

- 17 これを補っているのが、以下のような『とおりに～』という形の複合動詞であろう。

69) 佐々木さんは外の道路をたまたま誰かが通りかかると、知らない人でもおかまいなしに呼びかける。(ポプラの秋・82・83)

70) しかし、そのまま、まったく素知らぬ顔で彼女は茫然としている菊地のそばを通りすぎると画伯をかばうように真つ暗な外に姿を消した。(悪霊の午後・上・218)

71) 私は足音を忍ばせ、いちかばちかで納戸の前を通り抜けると、いつもの茶の間に辿り着いた。(ポプラの秋・161)

- 18 ○はその動詞の語彙の意味がその特性に関してmarkedである場合、一、○/ーはその動詞の語彙の意味がその特性に関してunmarkedである場合と言える(注13で言及した矛盾の場合もその一種であろう)。unmarkednessには様々な程度がある。Lyons(1977) p. 305～では、unmarkednessの程度の違いについて、一般的な形で論じられている。

- 19 表5のうち、過程性を持たず、結果性を持つのは『いく』『もどる』である。これらの動詞は、めざしていた目的地に到着するという到着性(注14参照)が強く、到着すなわち移動の終了の段階に重点が置かれやすいために過程性を持たず結果性を持つ、と考えられる。一方、過程性を持つのは『すすむ』『のぼる』『おきる』『わたる』である。宮島(1972)では、『すすむ』を「一定方向への移動」を表す動詞であると規定している(p. 265)。実際、『すすむ』は方向を示す名詞(句)とともに用いられることが多い。

72) 信夫は、

(前へ進め! 前へ進め!)

と、繰り返して、号令をかけながら、走っていた。(塩狩峠・133)

73) アドリア海の出口にあたるこの海域一帯は、コルフ島に着くまでは、海に乗り出し東に進むしかないのである。(レバントの海戦・150)

「一定方向」ということに関して言えば、『のぼる』『おきる』はより明白であり、方向を示す名詞

(句)とこれらの動詞との結合としては、『上に のぼる』『下に おりる』以外にありえないだろう。さらには、次のような例から、『わたる』も、「一方の側から他方の側への移動」を表すという言い方ができ、これも一種の「一定方向への移動」を表す動詞である。

74) でも私は、街でサンタクロースの恰好をした人が大売出しのチラシを配っていたりすると、慌てて道路の反対側に渡ってしまわずにはいられなかった。(ポプラの秋・105・106)

ここで、移動の始点が定まれば経由地が必然的に定まるという「一定方向性」が考えられる。「一定方向性」を持つ動詞であれば、必然的に経由性を持ち、また、移動の中間の段階に重点が置かれやすく、経由地が移動範囲を問題にできるものであれば過程性を持つことにもなる。また、この「一定方向性」が到着に関して無関心であるとするれば、完結性を持っている『のぼる』『おりる』『わたる』は、「一定方向性」あるいはそれに必然的にもなる経由性と、完結性との相互作用によって、経由地に終点がある移動を表す動詞であるということになり、常に到着性を持つ『いく』『もどる』と異なり、「(場所)に」とともに用いられるかどうかに応じて、到着によって終わる移動を示すかどうかが変わる動詞であることも説明可能になる。到着によって終わる移動を示す『すすむ』は到着性と「一定方向性」を併せ持つ動詞だと言える。経由性・到着性は、一定の格形式でその動詞とともに用いられる名詞(句)に特定の意味を与える動詞の語彙的な特性であった。この「一定方向性」も構文論的結合関係に際して明らかになるが、方向を示す名詞(句)と結合する場合には、特定の名詞(句)としか結合しないことによって明らかになる、という点で、経由性・到着性とは異なる。

参考文献

(引用に際しては、初出の場合を除いて、参照した書名を併記した)

- 石綿 敏雄 (1999) 『現代言語理論と格』 ひつじ書房
- 奥田 靖雄 (1967) 「語彙的な意味のあり方」(奥田靖雄(1984)に所収)
- (1968-72) 「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」(言語学研究会編(1983)に所収)
- (1974) 「単語をめぐって」(奥田靖雄(1984)に所収)
- (1976) 「言語の単位としての連語」(奥田靖雄(1984)に所収)
- (1977) 「アスペクトの研究をめぐって」(奥田靖雄(1984)に所収)
- (1980-81) 「言語の体系性」(奥田靖雄(1984)に所収)
- (1984) 『ことばの研究・序説』 むぎ書房
- (1986) 「条件づけを表現するつきそい・あわせ文——その体系性をめぐって——」
『教育国語』 87, 2-19, むぎ書房
- (1988a) 「時間の表現 (1)」『教育国語』 94, 2-17, むぎ書房
- (1988b) 「時間の表現 (2)」『教育国語』 95, 28-41, むぎ書房
- (1989) 「なかどめ——動詞の第二なかどめのばあい」言語学研究会編『ことばの科学2』
11-47, むぎ書房 (名義上は言語学研究会・構文論グループ著)
- 北原 博雄 (1998) 「移動動詞と共起する二格句とマデ格句——数量表現との共起関係に基づいた語彙
意味論的考察——」『国語学』 195, 98-84 (15-29)
- 工藤 真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』 ひつじ書房
- 言語学研究会編 (1983) 『日本語文法・連語論 (資料編)』 むぎ書房
- 言語学研究会・構文論グループ (1989) 「接続詞「とき」によってむすばれる、時間的なつきそい・
あわせ文」言語学研究会編『ことばの科学3』 119-134, むぎ書房

- 城田 俊 (1998) 『日本語形態論』 ひつじ書房
鈴木 重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』 むぎ書房
宮島 達夫 (1972) 『動詞の意味・用法の記述的研究』 秀英出版
———— (1984) 「日本語とヨーロッパ語の移動動詞」 (宮島達夫(1994)に所収)
———— (1986) 「格支配の量的側面」 (宮島達夫(1994)に所収)
———— (1989) 「動詞の意味範囲の日中比較」 (宮島達夫(1994)に所収)
———— (1994) 『語彙論研究』 むぎ書房
Lyons, J. (1977) *Semantics*. Vol.1. Cambridge University Press.
バーナード・コムリー (1976) (山田小枝訳(1988)) 『アスペクト』 むぎ書房
(Comrie, B. (1976) *Aspect*. Cambridge University Press.)

用例出典

有吉佐和子 『恍惚の人』 新潮文庫／江國香織 『きらきらひかる』 新潮文庫／同 『流しのしたの骨』 新潮文庫／遠藤周作 『悪霊の午後』 (上・下) 講談社文庫／同 『海と毒薬』 新潮文庫／折原一 『異人たちの館』 新潮文庫／塩野七生 『レバントの海戦』 新潮文庫／辻邦生 『雲の宴』 (上・下) 朝日文庫／坂東眞砂子 『山妣』 (上) 新潮文庫／三浦綾子 『塩狩峠』 新潮文庫／山田太一 『丘の上の向日葵』 新潮文庫／湯本香樹実 『ポプラの秋』 新潮文庫

付 記

「構文特性」に関する記述 (特に第1節) は、拙稿「構文論的結合関係から見た現代日本語の移動動詞の記述の試み」(東京外国語大学『日本研究教育年報(2000年度版)』2001年3月)を元にした(用語の使い方は一部変更した)。

(投稿受理日：2000年5月30日)

(改稿受理日：2001年2月11日)

岡田 幸彦 (おかだ ゆきひこ)

獨協大学外国語学部・拓殖大学言語文化研究所附属日本語研修センター非常勤講師
338-0013 埼玉県さいたま市鈴谷9-4-20-101
Tel/Fax 048-855-3609
yokada@dokkyo.ac.jp

An analysis of the verbs denoting spatial movement

— On the basis of syntactical, aspectual and taxis features —

OKADA Yukihiro

Dokkyo University, Takushoku University

Keywords

verbs denoting spatial movement, passage (+/-range), arrival, process' result, completion

Abstract

Some Japanese verbs denoting spatial movement can be combined with nouns denoting place, using “o.” These verbs mean “place passed” when combined with “place-o,” e.g., ‘*aruku*,’ ‘*iku*,’ ‘*modoru*,’ ‘*susumu*,’ ‘*noboru*,’ ‘*oriru*,’ ‘*wataru*’ and ‘*tooru*.’ Such verbs have **passage** as a syntactical semantic feature (i.e., semantic feature that appears as syntactical behaviour). In addition to “place-o,” ‘*aruku*’ can be combined with “place-made,” so we can call ‘*aruku*’ a **passage (+range)-verb**; ‘*iku*,’ ‘*modoru*,’ ‘*susumu*,’ ‘*noboru*’ and ‘*oriru*’ can be combined with “place-made” and “place-ni,” as **passage (+range)-arrival -verbs**; ‘*wataru*’ can be combined with “place-ni” as a **passage (-range)-arrival -verb**; ‘*tooru*’ can be combined only with “place-o,” and is a typical **passage (-range) -verb**. In addition, though ‘*noboru*,’ ‘*oriru*’ and ‘*wataru*’ have arrival, they can refer to the middle-stage of longer movement that continues, in common with ‘*tooru*.’

It is effective to describe the lexical meaning of these verbs in terms of three more semantic features. There are two aspectual features: 1) **Process**: when the verb is used in “(-si)teiru,” then the verb refers to the process of movement; 2) **Result**: when the verb is used in “(-si)teiru,” then the verb refers to the stay at the destination. A feature of taxis is **Completion**: a description of the terminal point can be followed after “(-suru) to” of that verb. (**Arrival entails completion**.) ‘*Iku*’ and ‘*modoru*’ have **result**. ‘*Susumu*’ has **result** and **process**. ‘*Noboru*,’ ‘*oriru*’ and ‘*wataru*’ have **completion** (as a basis of **arrival**) and **process**. ‘*Aruku*’ and ‘*tooru*’ have **process**, but not **completion**.